女子大國文　第百四十号　平成十九年一月三十日

翻刻　金光教布教文書　近藤本『御道案内』

付『御道案内』三本（藤沢本・近藤本・伊原本）内容概略対照表

中　前　正　志

日本の宗教を、神道や仏教、キリスト教といった近代以前の既成宗教と、金光教のほか天理教や黒住教など、幕末維新期頃以降に創唱された新宗教（さらには新々宗教）とに大別する時、前者に関わる説話については周知の如く種々の検討がなされているのに対して、後者に関する説話の方は、「近代が生んだ神話」として天理教教祖中山みきの『泥海口記』に注目する益田勝美氏「泥海口記」（『国文学』昭和五十年一月号）や、宗教学の側から体験談の役割を検討する島薗進氏「新宗教教団における体験談の位置―妙智會・立正佼成会・天理教―」（『東京大学宗教学年報』Ⅱ、昭60）があるくらいで、ほとんど検討の対象と意識さえされていない。そういう極端に偏向した研究状況を抱えたままでは、日本における宗教と説話の問題、日本宗教説話の問題は、到底充分には解明し得ないのではないか。先の拙稿「近代新宗教説話序論―金光教のおかげ話をめぐる二、三の問題について―」（『説話論集』第十一集「説話と宗教」、清文堂出版、平14）は、そんなごく素朴な疑問を出発点としたものであり、その拙稿についての若干の補足的検討は、最近の拙稿「金光教おかげ話余話」（『日本文学』55―8、平18）の中でも試みている。

右の拙稿二編は、数ある新宗教のうち、岡山を本拠に教祖金光大神により創唱された金光教に的を絞って、そのおかげ

話（霊験譚）を取り上げたものであるのだが、前者の拙稿の第一章では、『御道案内』とおかげ話」と題して、『御道案内』なる書がいかなる形でおかげ話を採録しているか、あれこれ検討・考察し、結果、おかげ話と向き合う熱烈な布教家のあり方など、興味深い問題を見出すことができた。小稿は、その『御道案内』の諸本のうち近藤本を翻刻し、合わせて、近藤本を含む同書の代表的なテキスト三本について、その内容の概略対照表を作成しようとするものである。

『御道案内』は、文政元年（一八一八）に岡山の米穀商備中屋の長男として生まれ、明治初期に、当時金光教にとってはほとんど未開の地であった大阪での布教に尽力した人物、初代白神新一郎（一八一八～一八八二）の著作である（初代白神については、「直信・先覚著作選」シリーズ第五集『初代白神新一郎』など参照、金光教徒社、昭57）。「金光教布教文書のさきがけであるとともに、教義書としてもはじめてのもの」（金光教本部教庁編纂・発行『金光教教典』付録「解題」、昭59）とされる。和泉乙三氏『初代白神先生と御道案内』（初代白神師偉徳奉讃会、昭28）福嶋真喜一氏「初代白神新一郎『御道案内』について」（『金光教学』6、昭38）福嶋義次氏「金光大神と初代白神」（金光教中近畿教務所編『中近き―教区機関誌―』、昭55）などにおいて検討される通り、金光大神の履歴や金神の性格、信心の種々心得等など、内容は多岐に亘っていて、また充分整理されずに羅列的になっている（小稿末尾の内容概略対照表参照）。

冒頭の序の末に明治四年に記した旨の記述があり、もともとはその頃の著作であると見られる。ただ、その時点のものに止まらず、以降にも初代白神が随時、増補加筆を繰り返していた。そして、刊行を見ることのなかった『御道案内』は、初代白神が筆写しては人々に与えていたとされる。さらに、その死後には他の信者たちによる写本も加わって、多種多様な伝本が存在しており、「明治33年までに設立された教会には、必ずといって『御道案内』が見出される」という（福嶋和一氏「『御道案内』の生まれて来る所以と初代白神師の布教」〈金光教近畿布教史'53『研究活動報告』9、金光教近畿布教史編纂委員会編集室、昭54〉）。前出福嶋真喜一論文は、それら伝本を三系統に分かって、藤沢本・近藤本・伊原本を、各

系統を代表する伝本と位置付け、さらに、それら三本が、藤沢本→近藤本→伊原本という順で次々に増補・改変されつつ成立していったらしいことを指摘した。概ね妥当な見解と認められる（ただ、同論について部分的に修正すべき点など、前出拙稿にて指摘してもいる）。

右の三本のうち、藤沢本は、前出『初代白神新一郎』や前出『金光教教典』のほか『御道案内』（金光教大阪教会、昭27）に、翻刻や影印が収載され、伊原本も、『御道案内』（金光教徒社、昭37）や初代白神先生百年祭委員会編『御道案内』（金光教大阪教会、昭57）に翻刻が収載されている。ところが、近藤本には、今のところ翻刻も影印もないようである。そこで、ここにその近藤本を翻刻しようとするものである。

近藤本は、大阪の金光教桃山教会所蔵。三巻一冊。袋綴。墨付四十七丁。茶色無地前表紙の中央に外題「㊟御道案内」（打付書）、左下に墨書「巻之一二三」。内題ナシ。序題「御道案内」。毎半葉八行。諸所に朱墨による振り仮名有り。四十六丁表に付箋が一紙貼付されている（伊原本では、この付箋に書かれた文章が本文化されている→内容概略対照表41b）。最終丁・四十七丁裏の左下に、本文とは別筆で「白神弥広真道別之命／我教父之御筆也／藤守」と墨書される。「弥広真道別之命」とは初代白神の諡号、「藤守」は、その弟子の近藤藤守（一八五五～一九一七、「直信・先覚著作選」シリーズ第四集『近藤藤守 遺作教話集』など参照、金光教徒社、昭56）。近藤による右の書込によって、近藤本が、初代白神の自筆本で、近藤に授けられたものであると知れる。また、「初代白神先生著／御自筆／「御道案内」」と表に墨書される箱蓋の裏書（後掲）によって、近藤本が大正元年に近藤から教老井上守忠に譲渡されたものであることも知れる。

以上、近藤本『御道案内』を翻刻しようとする事情・理由を述べると共に、同本の概略を紹介した。さらなる詳細については、前出拙稿を参照願いたい。

〈凡例〉

・行取りは元のままで、改丁箇所には、」1オ などと記した。基本的に通行字体に改めているが、多数見える誤字・宛字などは元のままである。また、差別用語も元のままとした。判読不能・困難な場合は、□で示した。

・全体を三十五段に分段し、その冒頭に1～35の番号を加えた。また、三十五段の各段を必要に応じてさらに分段、その冒頭にａｂｃ…という記号を付した。以上の分段は必ずしも厳密なものではなく、便宜的な措置である。

・翻刻の後に付した内容概略対照表の「近藤本」条の中の番号・記号は、右の分段番号・記号と対応している。

・内容概略対照表では、三本について同様に分段、各段の内容を簡略に示し、出来る限り上下対照し得るようにした。

・内容概略対照表における表記は、基本的に『御道案内』のあり方に従っている（「御蔭」など）。

1 御道案内序

神儒仏孰れに愚かは無れとも、爰に、
天地金乃御神様の、是まて諸人の心得とハ
異なる、其新たなる事聞り。小子、近来御
道に志し、御蔭を蒙んと欲して、日夜
神仏の真似せし処に、忝も日増に其
験しあり。新参未熟の小子申ハ、御道の
兄達にハ雖有憚り、余り難有さに
難黙止、三ッの宝の余り有御蔭を知らぬ」1オ

貴賤の御氏子と共に戴んと誘んか
為に、御道案内と表題し、不知不才の
小子、文々句々前後雖為混乱、兼々
見聞する処、思ひ出の儘其荒ましを粗
書記す而已。拙なき処ハ、見る人憐ミ許し
給へと云云。

明治四稔辛未晩春　備前岡山住　白神新一郎謹誌」1ウ

2 一、a天ヶ下無二広大なる御蔭の余りある大
御元社ハ、正直を基す。b此書記す処ハ、小子

私に申にあらす。世界第一天地金乃御神様
御教に、神ハ物を云す、金光大神を以て伝
ると宣しを、小子、御取次御伝申ハ、c学才
知弁説のよしあしを云にあらす、唯生の
儘なる信一心を尽す御道にして、勧善
懲悪ハ孰れも同し事なり。神国に生れて　」2オ
日夜御蔭を蒙さるハなし。神心せすんハ
有へからす。d速かに得度し信心なる人ハ、御
蔭を蒙る事、其身ハ勿論、先祖より一切の
精霊子々孫々末代の幸福徳なるへし。
折角聴ても、或ハ疑ひ、無理逆らひ、云崩す
人、又ハ空吹風の様に聞なかす人においてハ、
是非も無次第なり。
　大谷の深き恵を汲て知れ　」2ウ
　あわれなりけりきゝなかす人

3一、抑備中国浅口郡玉嶋湊より壱里西、大谷
村大御元社生神金光大神様と申奉
るハ、御壮年の比ハ歴々の御百性にて、農
業被為成しか、故ありて常に御金神様江
御信仰被為成、日増に御蔭を蒙れ給ふに
随ひ、益御修行被成在候事ハ、言語筆紙に
尽しかたし。当今ハ　白川殿の派に在して、　」3オ
生神金光大神様とハ、　日月金神様より
御直許にして、御道開きの祖神様なり。
日々夜々其新たなる事ハ申述るに尽す。于時
文化十一甲戌御年御誕生在し、今御健勝
にて、御生質ハ温和にして、威有て猛からす、
恭敷御安く、寛仁大度に、毎日、御広前に
早朝より暮まて御鎮座在し、農民より
出給ひ、大神の御位、生なから神と成せ給し事ハ、」3ウ
前代未聞の事なり。初心の人、家業除力有時ハ
参詣し、御拝奉りて、其新たなる難有事を知るへし。
　千早振高天原を今そ知る
　いさきよき身に神や住らむ

4一、a大空を天道と一ッの様に唱る人あれ共、天は天なり、
道ハ地なり。天地を以て天道なり。天の尊き新た

なる事ハ諸人知ると雖、地に金神様の其難有事
を知らさる歟。里ハ素より、山川海、　」４オ
日月様の照し給ふ程の処ハ、異国に至るまて、
地の大氏神なり、御氏子なり。
[b]日月金神様を合て、世界の御三宝様なり。[c]日夜
世界中を御守護在し、御烈き事ハ、諸人知る
通りなれ共、又、善事にハ御柔和なる、
大慈大悲大吉神、金乃御神様、福の神なり。
[d]一乃御眷属にハ大将軍様御会式三日。[e]日々夜々に
御恩厚と申ハ、一切衆生の生るゝより、五穀を初め」４ウ
一切万物出来るも、寝ても起ても、死して
葬らるゝに至りても、悉皆、金神様の御地内
なり。如何成神社仏閣有とても、地内を貸して
有との宣し、此尊き日天四様月天四様御道ハ此四字
金神様の御社、日本国中に有事を未聞。
[f]然と雖、金神様の思召には、氏子一統に恐るゝ
事を止めて、心安くして、何によらす世界中の事に
差支の無様、第一、病ひ有てハ貴賤共に職業成」５オ
かたし、諸病を平愈させ、体を丈夫達者になし、
又、寿命無てハ叶わす、延命を守り、開運出世、
家業繁昌、渡世不自由無様、其身一代の繁昌ハ
繁昌にあらす、子々孫々長久、先祖より親族一切
精霊をうかませ、其身ハ生なから神に御取立、との
御誓ひなり。[g]一統日々夜々御蔭を蒙さる無き
中にも、己か御不礼御麁抹御気障り等の罪科を
作して、御知らせ御尤めを蒙れハ、己か事ハ云すに、」５ウ
勿体無も金神様を邪鬼の如くに恐れ、悪神の様に
意地悪き人を金神、在郷にてハ村金神、町にてハ
町内金神抔と、悪きに比して申人もあり。慎心
すへし。恐れて己より六ヶ敷神様の様にする
故に、其通りに被為成、又、難有御神様御蔭を
蒙んと信一心に御拝奉る時ハ、其通りに広大
無二の御蔭を御授ケ御助ケ被為成。人々己か心得
善悪次第、鏡に影の移るか如し。[h]然るに、適々」６オ
信仰致様の人ありても、角の方に云訳程の
御棚を作して、とふそ御呵り御尤めの無様にと

翻刻　金光教布教文書 近藤本『御道案内』

はかりにて、御蔭を蒙ふと云心ハなく、只恐々
逃々、御拝する而已。是へつらへなり。何そ是を
誠の信心といわん哉。氏神として氏子を悪ミ
給ふにあらす。人々是迄皆心得違ひなり。爰を
得と勘弁有へし。

5一、此広大の御道を守る平生心得の事第一にハ、」6ウ
神社仏閣に限らす、尊所御前を通る時にハ、
何処にても謹て礼拝して通るへし。しかし、
日月様江向ひ御直に少度の礼拝ハ致ても、
拍手を打事、又ハ御祓抔、長々敷上る事ハ不相成。
用捨たるへし。是、御道においてハ大事の事なり。

6一、御上様江忠義を尽し、御法度を相守り、
御年貢差支無様、平生家業出情し、倹約を
専らにし、水も麁採に遣ふへからす。心ハ小く、気ハ 」7オ
大きく広く持へし。往古、青砥氏川中江銭拾文
落せしを、五拾文か松明を買求め、人を雇ひて、
川中をさかさせし。是等事御道に叶しなり。

7一、父母に事りて篤孝にして、何にても少しも心配
懸ぬ様安心なさしめ、家内中、一家親族眷
属に至る迄心揃て睦敷し、世間にハ信義を
以て交り、上を敬ひ下を憐ミ、困窮成を救ひ、
人に心配懸ぬ様、罪科のかゝらぬ様、困らせぬ様、」7ウ
差支無様、腹を立させぬ様、欲はす様、安心さす様、
助る様致との御神教なり。又、信仁のものにハ無
筈なれ共、若し悪き人に出会、喧嘩口論致懸る様
の事有ても、負て退くへし。負て勝の御道なり。
何にても堪忍すへし。堪忍無てハ、御道を守る事相成かたし。

8一、疾妬偏執のもの有て、密かに禍を為す共、腹も
立す、意趣遺恨にも思わす、又、盗人に物を取れても
怒らすに、大厄を小難て遁れた心に成て、我ハ堪忍」8オ
すれ共、若し外々にてケ様の事有てハ、取れた
本人ハ嘸困るし、又、賊徒等の幾末の事を思ひ憐ミ、
何卒善心に立還る様に祈念し遣し、何にても陰
徳を積様に致へし。腹立紛れに、足留の、腹苦る
様に被下成抔と願ふてハ、御請なし。如何成大悪
人たり共、皆御氏子なれハ、御歎き給ふて其罪を

悪ミ給ふ共、其人を悪ミ給ハす。付1殊に失ものと走り人の
事を御伺ひ御願申事ハ、御断なり。是非入用の」8ウ
品なれハ、前に申如く憐ミを以て願ふなれハ、其儘戻る歟、
減して戻る歟、御操合あり。平生信仰の内にハ
盗難稀なり。付2大御元社にハ御締りと云事なし。
毎も夜中御明ケ放しなり。小子も、盗人と薬ハ
敷居より内へハ入ましきなり。是に準して、火
難等ハ有ましきなり。
9一、我子たり共、天地の御分身、御賜ものなり。賤か家にハ、
終にハ打擲し、呵るにも、出て行、戻るなと云事、諸」9オ
勝負事、無益の殺生、毫鍼、灸、是等の事、皆御
嫌ひなり。小児共、灸ハすへす共、健て丈夫て無事
勇ましく成長すれハ宜しからふとの御事なり。
10一、a御道神心ハ至りて安き事なるに、人々、己より
何事も無理に六ケ敷し、第一、方角か悪ひ、年廻り
月柄日柄か悪ひのと、差支の事なり。又、不浄、穢れ、
忌腹のと、是差支なり。或ハ、あれは毒よ、是を飲
食すれハあたるのと、是皆差支の事而已云なり。」9ウ

御道にハ、ケ様にせまき小き論を云にあらす。世界
中の事、正路の事なら、自由自在、勝手次第なり。
b御道信仰致すに、神文抔為すに不及。去ル外方江
御信心の御方、此方御道江信心の志しにて、神文
認め奉納せんと持参致されしか、御元社にハ御納受
不被成。神文証文書ても、間違ふ事あり。是ハ無共
違わぬか、信心なり。c又、賽銭初穂にも不及。神心
致にも、賽銭初穂無て御蔭か受られぬもの」10オ
なれハ、貧窮なるものハ、病気何によらす、助る事
出来ぬとの御理解なり。旦、何方彼方の祈祷、
札守り、布施、初穂、d但シ百弐拾銅壱貫、弐百拾弐
貫文抔、段々是有よし。是、御初穂御布施の
高いのか、御蔭の多ひ道理なり。随分冨家の人ハ
自由自在に求めても、貧者ハ何程欲しくても
求めかたく、察して見れハ、貧者ハ御蔭も蒙ら
れぬ道理なり。御道ハ、金銭初穂の有無の差別」10ウ
無。d又、婦人月厄の穢れ、産の穢れ、死穢れ、忌腹のと
云事なく、御道の不浄と申ハ、悪しき事を犯すか

不浄にて、悪き事ハ、少しても思ハす、云す、為す、清く
潔きよけれハ、仮にも穢るゝ事無。[e]又御祓を
上ケ、経巻を読誦する事ハ、己か気任せに致へし。
御祓や仏経はかりて御蔭の有ものなれハ、
御祓仏経を知らぬ人も多し。此人達ハ、御蔭ハ
蒙れぬ道理なり。仮令(タトイ)千度万度の祓にハ、　」11オ
諸入費も多し。此方御道、一度祓にも不及。又、
香灯明種々の備物致し、千部万部の読経、猶
百万遍の大般若経の、千巻陀羅尼と、数々大祈
祷有共、入費も多し。貧者迚も不及。又、己か信
一心無てハ、無益の事なり。猶、神か教を用ひす、親の
云事を聞ぬものハ、取へなしと宣し。[f]本朝元
神道なるを、後、儒道(シュ)仏法頑(カタクナ)に何宗彼宗(カニシウ)のと
分隔(ワケヘタツ)れ共、夫にてハ片切て差支へ、事せまく、」11ウ
御道ハ、神儒仏の差別無、貴賤の御氏子一統、
天ケ下、忠孝仁義慈悲信而已専らに尽す、
広大無辺の御道神仰致とても、家業の
妨ケにならぬ様、閑敷(イソカ)時には礼拝するに不及。
[g]唯常に　日天四様の御陽気、月天四様の御潤ひ、
金神様の御大地、天地の御恵にて成熟す御米、
則御三宝様と申なり。其外万物御三方様の外るゝ
事なく、寝ても起ても、一足歩ミても、一飯を食ても、」12オ
頂き、天地の御恩の難有事を思ひ忘れぬか、御道の
信心なり。仮令、手摺(スリ)足すり、水行、はたか参り致ても、
心か間違ふと無益なり。又、御会式をも忘れぬ様に、
御掃除等も致し、相待楽しむ位に致へし。[h]我宅に
御棚か有ハよし。無とても、金神様ハ、其家々に御
詰切御座(ヲウシマシマ)在すなり。家業除(カキヤウヒ)力(マ)あるとき、壁(カヘ)なりと
柱にても、何方成共勝手よき方江向ひ、己か帰依(キエ)
する処を以て、抽丹誠(ヌキンシテタンセイ)左(シ)之通。　」12ウ
廿四日　十日
日天四　生神金光大神
廿三日
月天四　天地金乃神　御会式毎月廿二日（上割書は朱）御祭祀九月
　　のこらす金神
如此御神号を唱て礼拝し、[i]捧(サヘケ)物等ハ、毎日御膳の
焚初穂を三盛り備ふへし。御かゝミを備ふ節ハ、
三ッ重ねに致へし、其外、焚た物、焼た物、生ものにも

限らす、世界中の品もの、四ツ足の物の類を除ケは、
至来のもの、又かんき餅にても何成共、初穂ならハ」13オ
苦しからす、備ふへし。[j]世界第一大氏神
天地の御神様、御祭致にも、角の方の御棚ハ、
御不礼(レイ)、御麁抹(ソマツ)なり、勿体なし。正面真中の
様の処敷、又ハ座敷の床の様の処江、諸神様
とハ別段に祭るへし。[k]御元社より御札守りハ
出不申。[l]暦ハ、諸人知る通り、元日より大三十日まて、
日月金神様の御事而已にして、外様の事ハ
出不申。御神体に祭るへし。[m]小子ハ、此御本を」13ウ
御神体に祈念し、朝暮御拝奉るにも、第一
宝詐悠天下泰平御国成就万皆康ク、
或ハ遠方に火事有と見れハ、誰頼む人無共鎮
火の祈念し、火鎮りた後、頼ミた人無れハ礼云人も
無共、又、風荒吹ときにハ、難舟火難の無様、何
にても差支の無様、世界中の為、善事而已願ひ
祈念し、人を助ケて己か助るの御道、我事ハ
願わす共御蔭ハ被下との御誓(チカ)ひなり。」14オ
則有御神歌にも、
心たに信の道に叶ひなは
祈らすとても神や守らん
11一、無人にて家業除力無敷、遠国人や、或ハ主人持の
勤ある人、又ハ老人、足弱敷、子持の婦人、其外差支の
有人、御元社江参詣致度ても出来ぬ事を愁る
事なかれ。千里を隔る共、信一心を以て願ふならハ、
速に受取と宣し。仮令願事有て参るとても、」14ウ
何も持て来るにハ及す。唯信の心一ッを持て来れと
宣し。又、願ひの御取次、御祈念ハ被為下成ても、
肝心(カンシン)の御蔭ハ我心に有へし。自身の信一心を
以て御蔭を受るの御道、浮気(ウワキ)普心(シンシン)ハ御蔭か
薄し。力を入て深信(シンシン)致へし。神心(シンシン)ハ仕徳、御蔭ハ
取勝なり。氏親神なり、御氏子なれハ、平生
孝子の父母に事るか如し。他行致ときにハ、願ひ
御届ケ申て出れハ、留守外共に無事用向も調ふ」15オ
へし。帰れハ直に御礼御届ケ奉申上へし。
信あれハ自由自在におもしろや

こゝろ神楽の鈴しかるらむ

12一、[a]御道ハ、病人何によらす、如何成事にも御祈祷と
云事無。夫故に、身に附たる着る物、木綿切の、
白米の、其外捧もの入用と云事無。若し如何様の
事有とき御願ひに参詣致ても、御初穂の多
少にもよらす、有も無も御変り無、御祈念被為」15ウ
下成、日を限て御裁伝(サイテン)、御理解(リカイ)あり。謹(ツヽシミ)て
聴聞(チヤウモン)すへし。
大神様ハ、毎も先を楽しめと宣しなり。
大谷の御道をすくに行ならハ
咲たのしめや花もあるらん
[b]如比、自由自在にして、物の入ぬ広大の御道
故、終にハ御祢巫(ネキ)、御神子(ミコ)、修験者(ヤマフシ)、御医者(イシヤ)、易者(エキシヤ)
等の多き中にハ、若し其道の妨ケ共ならぬかと」16オ
思ふ人有共、さにあらす。皆御氏子なり。氏
神として何そ氏子の妨ケ(サマタ)をなさらん哉。神
心致せハ、其道々の職業繁昌させふとの
御誓ひなり。

御道案内巻の上終」16ウ

御道案内巻乃中

13一、御道未た不案内の人ハ、第一普請、作事、家移り、
宅替、他行、嫁入、聟とり、相談事、竹木を伐、畜
類の遣とり、産の向様、捨物等、何によらす、己か
年廻り、鬼門、未申、年月日廻り、九魔王子、時
ふさかり等の御方角の事に吟味し、煩敷事
多し。仮令明きの方、吉方たり共、皆
金神様の御地内なり。年月日柄、方角を」17オ
相撰ミ、家相の吟味しても、御気障りの事
あれハ無益なり。繁昌も相ならす。何程子供か
出生しても、育る事無。其外、種々の事発る
事あり。何方彼方にて見て貰ひたれハ、何月
何日何時にハ構わぬ抔と、御留守を覗ひ、己か気
儘成事を致し、又、嫁入、其外他行に、外の道江
廻りて行、金神をたます共、たまされハせぬ。又
金神除とて注連(シユメ)を曳置(ヒキオク)とも、注連(シユメ)には」17ウ

恐れぬと宣し。猶、死人葬式ハ大礼なるに、葬り
穴を掘るにハ、方角日柄を撰ます、勝手次第の
事を致し、若し御気障り等の事有ときハ、
死人の為、跡の為、悪しゝなり。
14
一、[a]御道信厚のものにおいてハ、是に表裏の違ひ
なり。己か作廻ひ勝手によりてハ、年廻り、八方
的殺共云す、鬼門、未申、三年ふさかり、其外
何れの御方角に向ひ、家蔵建ふと、又厠を　」18オ
作す共、三輪亡の日建すへ、何成共、以前に、御断、
御願ひ奉申上、御神許を蒙れハ、其日より
自由自在、勝手次第に致すなり。此広
大なる御道の訳を知らぬ人ハ、あれよ是よと
物を入て心配し、猶他行するに、今日ハ九魔
王子に当る、除ケる抔と云て、恐て逃るなり。
夫を平生信厚のものハ、今日幸ひ九魔の御
金神様の御廻り合なり、御蔭を蒙んと、　」18ウ
御拝奉りて、小児の母を慕ふか如く御縋り
申せハ、御氏子なれハ、何そ是を御尤め、御呵り
なさらん哉。心の置処の一ツなり。[b]人によりてハ、
私にハ御蔭かなひ、何程信心しても同し事
なりと、己か信心の足ぬ事を云。是、愚知なり、
誤りなり。　金神様にハ、世界一統氏子と
宣ひ、御蔭を御授ケ御助ケ度思召在し也。
[c]吁詐と云事ハ、人界の申事にして、神に吁詐ハ」19オ
無なりと宣ひ、疑ハす、迷ハす、濁らす、我を捨、
身の上の事ハ一切あなた任せと、力を入て信心
なる時ハ、御蔭ハ速に顕然なり。神か教を
用ひす、親の云事を聞ぬものハ、取得なしと宣し。
　天地の神にいつわりなきものを
　疑ふならハ何かまことそ
15
一、病気其外何事にも、願主によりてハ、何方
彼方の御蔭、あれよ是よと周章人あり。　」19ウ
心か二ッ三ッ五ッにも成て、是濁るなり。夫丈ケ
心を配りたる功ハ有にもせよ、一心とハ申かたし。
孰の御神仏様江願かけ、又、人を憑とても、
たのミ様によりて、力の入処の相違あり。

願主の心得有へき事、信一心を起すへし。
是肝要なり。

16 a御蔭の事ハ書記すにハ尽せと、兼て見聞
する処、初心の人江、其荒ましを粗左に記す。」20オ
b一、御武家様にハ、去年御戦争之節、平生
御道御信仰の御方様、御出張之砌、鉄炮玉
来りて、袖に当り、刀の鞘に当、柄にあたりても、
御身にハ障り無、御難を遁れ給ひ、又、外に同し
御出張の御方様、鋏炮疵を蒙られ、玉の骨に
煮へ附たるハ、種々御療治被成ても取かたきも、
御信心被成て、いつの間にかハ取失しなり。

17 一、a御百性の農作に、他に肥しを入しと、御」20ウ
信心の御方、肥しを他の半分も入さるに、出
来込よく、取実も爾と勝しとなり。b又、虫
気の有ときハ、御神酒を笹に附て振て、
速に失しなり。c猶、田畑乾かしてよきハ
かわかし、しめりてよきハしめりを遣し、
金神の地内なれハ、好様にして遣すと宣し。
同しならひの田畑に、出来不出来、甲乙有を
以て知るへし。d五穀成熟も己か心にあり。」21オ
信心すへし。猶、凶作を天災の様に云て歎く
事なかれ。御道におひてハ、自身の恥辱なり。
秋の田の刈穂淋しく悲しきハ
おのか信の足らぬ恥なり
e猶、耕すにも畔を譲り、行ものハ道を譲り、
御氏子一統貴賤和睦し、天地の御神様にも
感応在して、一切災もすくなく、世界も
嘸順風順雨、夫も夜降て昼快晴し、」21ウ
年々万穀豊熟し、山ハ茂り、池川海に魚
鳥沢山なりし。自然人気も寛々として、
天ケ下平穏成へく、訴訟等も数くなく、
御上様にも御機嫌成就、御安堵被為成へし。
是、一統の忠義共成へし。其身の徳なり。謹而
信厚すへし。小子、平生是を祈念する而已。

18 一、a普請作事ハ、前に申如く、勝手次第、自由自在
に致て、大工、日雇、手伝、怪我過まちと云事を」22オ

未聞。又、難を遁し事ハ、書しるしかたし。[b]又、鍛冶職に、金床痛ミて仕事出来かね、仕替るまて御願ひ申て、毎朝金床に御神酒を附て刃物を打しに、格別の出来にて、向鎚するものも難有惘しなり。余ハ、是に準し察し知るへし。

19 一、[a]商人御蔭を蒙りたる多き中にも、去ル酒屋に仕込の酒桶数多痛ミかけ、身代にも拘る」22ウ

へき処、御神酒を入置て元の如くに直しなり。[b]惣而味噌漬もの何によらす、作り物味ヲ違ひかけに、御神酒を入置て直るなり。

[c]右此条々ハ、御道にハ小事にして、書記すにハ足らすと雖、畢竟初心の人に粗知らせる而已。

20 一、上々様方の御縁気、御縁談の事ハ、格別なり。農民町家におゐて、当世縁談に、何方にも第一、血伝、家柄の事を頑に吟味し、旧家の家柄のと」23オ

云、又、成上りの、新出来ものゝ、貴賤のと慢り、其家柄、旧家の元の元を押て吟味をする時には、善き中にも又悪き事あり。猶成上りの、新出来ものゝ、卑賤のものたり共、途中より出来たものにもあらす、皆先祖より元の元有て、是皆旧家なり。足下に見る事なかれ。盛衰ハ世の習ひ、又、非道の冨を羨ミへからす。画餅の如し。仮令往古より身代今幸ひにして、其儘の」23ウ

旧家にても、油断ならす。当時節柄、浮雲の如く、何時変化も斗りかたし。或ハ零落して、漸く隅の方にイミ居る人も多し。得家柄の事を云て、還りて先祖を恥しめる事あり。何程旧家の人たり共、当時壮んの人にハ及へからす。随順せされハ立かたし。正路に衰ふも軽すへからす。冬枯の草木も、時至れハ、芽ふき花咲事もあり。何の愁かあらん。信とこゝろを尽すへし。家柄の吟味」24オ

より、人柄の吟味か大しなり。

21 一、血伝の事ハ、何方にも吟味する其中に、血縁不評の人たにも、是非聞合、吟味ケ間敷する事ハ、御法体と云もの歟。陰にて聞人爪はしき、笑止なり。又血

統宜き中にも、親類多き鼻にハ、終に人の嫌ふ
家も有んか。猶親兄弟、又濃ひ親るい、中嫌ふと
雖、本人勝手によりて縁組致と、親兄弟の
中にても、夫故絶交致す事あり。然るといへ共、」24ウ
親兄弟の血すしに絶交ハ有ましき。其時の間合
を云もの歟。笑止の事なり。又、血統自慢の中に
ふと悪疾の人出来ると、世間江云訳に、女の恨ミて
病ると、程よき様云なせ共、何程云訳しても、一旦
悪疾あれハ、血統ハ後来に残るへし。譬ハ黒に
染たるものハ、元の白地にハ成かたし。又、女の恨ミを
程よき様云なせ共、女に夫程の恨を受る様、以前に
取向ケを致た人情ハ、如何恥かしからすや。是皆」25オ
何の益か有ん。御道ハ広大にして、天ヶ下一統、
鳥獣魚虫草木に至る迄、天地の間に生るものハ、
皆御氏子なり。兄弟の道理なり。何によらす、
悪きハ善きに御祭り替被為下成。現在の業病も、
御蔭を蒙りて、速に平愈の人も数多なり。
人ハ則、天ヶ下の御賜ものなり。天地の神と同根
にして、皆神なれ共、神の道を用ひす。種々に
迷ひて色々悪業し自然苦しむる事を、」25ウ
天地の御神様にハ御歎き給ふなり。御道信
厚致せハ、何そ無事の御賜ものに、病気ハ勿論、
何にても悪事災ひ発る事なし。何程血統か
宜く、又、相生の善悪、四悪、十悪、丙午、未女抔と云
へからす。皆差支の事而已なり。御道においてハ
小き論なり。何程血統吟味し相生宜とても、
天地の御神様の御気障り御罰を蒙れハ、
病煩ひにも限らす、何事も左り廻りに成、災ひ」26オ
発り、何程子供か出生しても育る事なく、
患ひ絶す。折角難有面白嬉き神世を、憂
歎き暮す事、戦々競々たり。
22一、a妊娠の婦人、御道にハ択食り病と云事なし。腹
帯もするに不及。何成共好物飲食し、体を
丈夫に致し置へし。如何様の事にも似ると云事
なし。何にても前に御願ひ申て致へし。産の
節ハ、御棚の御前にて、自身の勝手よき」26ウ

何方成共向ひ、産を致へし。但し、御暦に
此方江向ひて産を為すと知らせ有方たり共、
苦しからす。後ろ神に立て安産させふとの
御誓ひなり。[b]小児ハ自身に取揚ケ、跡て腰湯
抔致し、又、捨ものハ、御断御願ひ申て、勝手
よき所江捨るなり。猶、振薬の替りにハ、御
神酒、御洗米を頂戴し、小児にハ、三ッ薬の
替り、御神酒を少度口に附戴せ置へし。」27オ
親ハ翌日より平生に成の御道なり。[c]去ル
農家の妻女、田畝より帰られ、洗足の折柄、
其たらいの中へ安く産落し、直に其湯にて
自身に取揚ケしなり。[d]又、女の髪結、髪を結
さしにて安産し、翌朝ハ、平生の通りにして
髪数を結ひ、其外、布機織のとき産気催し、
速に安産致す様の事、あけてかつへかたし。
疑ふへからす。御神心家ハ、皆此のことし。[e]又、」27ウ
身代豊かにして、何不自由無渡世する中に、年
経るまて子供の無事而已不足に思ひ歎く人あり。
御願申せハ、子御授ケ被為下成へし。毎度教に、
六十一の子にかゝると云事有と宣し。子の無事
愁ふへからす。又、貧き賤か家に子供多き中に、
又も子供出来る事を、愁気煩敷思ひ嫌ふ人
あり。是も早く御願ひ申せハ、好様安心の御操合
あり。自由自在に被為下成へし。」28オ
23一、疱瘡はしかハ、何方にも子供の大厄なりと、誰も
恐れて、忌服、穢を嫌ひ、毒養生、猶、伽とる
ものも、月代、髪結、沐浴を止め、其外差支の
事多し。御道ハ、何を致すにも、前に御願ひ
申て執行なり。或ハ海老、蛸、鮒、鰯、其外酒の
るい、何成共好物飲食させ、体を丈夫達者に
なして、安く目出度速に仕風なり。
24一、大御元社壱丁御前に、向明神様と申あり。」28ウ
御婦人の御盲なり。先年、御眼病之節、外方
にて種々御療治、御養生、御信心被為成候へ共、
験しなし。次第に重らせ給ひ、終に御一命にも
拘らせ給ひしにより、故ありて御元社江御願ひに

参られしか、延引なりと宣ひ、早く来らハ此ハ
せましものを、併し願ふとあらハ、目ハ見へすとも
不自由ハさせましと宣ひ、夫より御神厚被為成。
只今御盲の事なれハ昼夜の御隔なく、　」29オ
針の耳そを御通し、縫もの、仕立、一切布機
織、其外女の業、御差支と云事無。初心の人、御元
社江参詣の序にハ、御拝然るへし。御元社にてハ
御通夜ハ不相成候へ共、此方にてハ相成へし。諸人
を御助ヶ被為成、其新たなる難有事を知るへし。
25
一、a御道信厚なして、盲の目の明き、いさりの足の
立たのハ、珍しからす。業病、難病たり共、日を
限りて平愈なさしめ給ひ、b何病気にても　」29ウ
食禁毒養生と云事無。地内に生するものに
毒ハなし。何成共好もの飲食し、体を丈夫
達者に致へしと宣し。併、四ッ足のものゝ類ハ
格別の品なれハ、其人々の心任せに致へし。
c又、怪我、過ち、切疵、何にても痛ミ処有人、御神
酒を御奉備て頂戴し、薬の如く、呑たり附
たり、腰より下江ハ、少度口に入て用ゆへし。隠し
処、肛門、足の裏たり共、苦しからす、附用ゆへし。」30オ
d途中にて、怪我過ちして血の出る時、御神酒
御洗米ハなし。其処の草ても土ても取りて、
生神金光大神様と御拝し、御願ひ奉て
用ゆる時ハ、血速に留り、其儘愈るなり。e猶、難
舟を助り、火難、盗難を遁し御蔭の事ハ、
書記すに遑まあらす。f又、数年の眼病難病の
諸所て祈祷の仕尽し、薬の呑尽し、種々に
しても直らぬを、御蔭を蒙りて速に　」30ウ
直りたるを、不思議に惘る人あり。何も珍し
からす。御道ハ、直るか本道にて、直らぬか不思
議なり、其人の恥なり。是皆自心の信なく、
天地の神に吁詐の無を疑ひ、種々濁りて、
外に迷ひ、天命の時節の、前世の宿業宿縁
のと、自心より直らぬ道理を云人も有。故に
直らぬなり。御道ハ、忝も今迄の罪科ハ
御祓除ヶ被為下成へし。為す処の願ひとして　」31オ

成就為すと云事なし。[g]小子、覚の事も有て、
丼り茶わん類、われものを集め置、是を御
神酒を以て継んと御拝奉て、御願ひ申の
処に、御教に、是ハ焼継屋あり、是を家業に渡
世す、是を手元て継ハ焼継屋の家業なし、
継代ハ五分壱匁弐匁歎の事なり、夫より千金出し
ても命ハ継まいか、諸人の其命を継分別を
致へしと御闔被為下。奉恐入、誠に難有感涙」31ウ
せり。[h]右御蔭の条々ハ、兼て御信仁の御方様にハ
御承知なり。其外、広大奇異なる御蔭の事を申ハ、
御元社より御差留に候へハ、爰に差扣申候。余ハ、
御道深厚し、天然自然に知るへし。[i]猶、何成
とも御蔭ハ被為下候へ共、己か分限を弁へ足る
事を知り、規を踰す慢心を慎ミへし。
26
一、[a]人ハ則天地の神と同根にして、皆神なる身を以て、
神の道を用ひす、種々悪業し迷ひ苦しる事、」32オ
終に人面獣心の事もあり。御神様にも歎き給ふ也。
最安き此御道信心致せハ、生なから神になる身を。

嗚呼惜むへし。御道を知らねハ、是非もなく、若死の
人或大病人、良薬を用ひ良医集り種々手を
尽し、迚も叶わぬと手を放す事あれハ、周章し、
寿命か買るものなれハ当家にハ千金も厭す、
其次ハ、家床に放れても彼を今一度健に致度と
詫歎きても、詮なし。[b]御道ハ格別なり。医沙ハ」32ウ
手を放しても、神ハ手を放す事無と宣ひ、信一心を
以て御縋り御願ひ申せハ、無寿命も御継、御授ケ
被為下に、当世の人、六十位に成と、先操をして隠居
気になり、法体し生なから死人同様に法名を号、
石塔を建置、死を待急くの歎、又、あた口にも、死ねハ
攪くに御迎ひか来らぬ抔と、死に覚悟をする事ハ、
御神様にハ御嫌ひ被為成。愚かにも死なねハ攪ケ
ぬ位の人なれハ、後世迚も安楽の程覚束なし。」33オ
御道ハ、老人の絶体絶命成ものも、御蔭を蒙
れハ、速に御引取被為下成。往生の為、後の為なるへし。

老の身も咲をからしななからへて
神世さかりの花を見よかし

[c]世諺にも、命ありての物種。月雪花、詩歌音曲の
楽しミ、琴、三味線、芝居、浄るり、物見、酒宴、遊興、
何の慰ミも、金鶏所持せし幾万貫の長者ても、
無事堅固寿命無てハ不相成。此寿命を延ひ　」33ウ
縮め自由自在に被為成るゝ、
天地金乃御神様なり。[d]御蔭を蒙り、改て生る
覚悟にし、自由自在難有神世て、六十
七十及八十九十にも限らす、長命する気になり、
我身霊をいたましむる事無、陰気を廃し陽気を
以て、日々に新たに、難有面白く潔よく、朝ハ
日天四様に起負す、永き中にハ無にも非す、時の
はやり風、何病気にも呑れぬ様、押勝へし。　」34オ
[e]猶、其時折柄によりて、無拠空病不快を構ゆる
事あり。是、御道においてハ、不可なり。勿体無も
天地の御賜もの、不事なるに疵を附る道理なり。
慎心へし。
御道案内巻の中終　」34ウ

27一、[a]世界第一広大なる明けし此御道を、月に村
雲、花に風とや、何の弁へも無、愚かなるもの、恥も
為す、御氏子として金言逆耳の習ひ、寸善
尺魔歟、しよのミて云事歟、証拠もなき空
悪口を云触し、猶狐狸の類ひ歟、のりくら歟、
はやり神歟の様に、色々嘲るものあり。大功細勤を顧す雖、
大神様の御艱難の程、恐多くも勿体無次
第なり。[b]此尊き大氏親神、　」35オ
天地金乃御神様を、氏子として嘲哢し、
若し御気障り共相成、押へを受る事ある時ハ、
運勢衰へ左り廻りと成、終に憂のはし共相
成ん歟。又、諸人も見聞し知る通り、御方角、
年月日柄を相撰ミ、家相を吟味し、地固めの
祈祷、棟上の儀式も祝ひて、新に家蔵堅固に
建ても、御気障り共相成ハ、御烈き時にハ、一度に
崩し微塵に成し給ひ、猶俄に日の暮たる様に、」35ウ
幾万貫の身代たり共、はた〳〵に仕廻ひ一夜に亡ひんか、
猶知りてすれハ亭主より取、知らすに致せハ

牛馬より取てしまふとの御事なり。又、七殺七墓
にハ限らす幾数も築き、跡ハ亡所と成、青草の
栄、或ハ、蒲団畳牢の病人、良医良薬を
用ゆる共功なし。何処如何成諸社寺々にて
大祈祷致ても、御障りの御断、御筋立、御納
受無てハ、祈祷為す。又、金銭初穂を以て　」36オ
断を聞く金神と思ふなと宣し。夫故、孰れの
大社御神諸仏菩薩様の御蔭を蒙る事
不相成。仮令　日月様の御蔭を蒙り生るゝ、
何処の申子たり共、生れ出たる所ハ金神の地内
なれハ、気障りの事有ハ、命を取てしまひ、何程
出生致ても一人も育てさせぬとの御事なり。御
道の新たなる其尊き事、爰を以て察し
知るへし。戦々競々たり。　」36ウ
28一、[a]御不礼、御麁抹、御気障り等の事致て、大小御
知らせ、御尤めを蒙らさるものハすくなし。其身に
別条無共、其子歟、孫の代に至りてハ、一旦の御知らせ、
是非顕するとの御事なり。其身壮んに一花の
繁栄し、子孫の代に至りて衰へ零落する歟。
是なる哉。旦、普く世にも、自分免許の利口、自
慢の人、自身の事ハ、猶人の事にもたつさわり、鷺を
烏と非を理に云紛かし、云貫き、云勝様の人を」37オ
撰ひ人抔と誉る人あれ共、謀計を以て眼前利
潤を得る共、水の泡なり。何そ他人の愁ひ以て、己か
身を安ふせんと思ふ共、天地神明欽ひ給わす。
正直実貞の人、白き事を黒に云負たる、残念腹立
炎、火炎、悪知恵の己か身の幾末、子孫に報ん歟。
悪利口き撰ひ人と云か、撰ひ憂めを見、歎き悲しむ共、
詮なし。子孫可愛ハ、天地御神様の御気障り、
罪科罰を蒙らぬ様、残らぬ様、信を尽し、　」37ウ
善種を蒔置へし。[b]兼々宣しにも、氏子を
何の呵り度事も、尤め度事もなし。譬ハ、親の子を
持多き中にハ、性根の悪ひ子の生根を直したさ、
呵りたり、爪りて見たり、あゝしたら直る歟、こふ
したら直らふ歟、心を尽し説檻し、生根の悪ひ
子程か可愛ハ、神も同然との御事なり。[c]猶、鷺ハ

驚、烏ハからす、白黒を明かに、信を云か、御道なり、信心
なり。正直信の女童の衆や、疎るゝ愚鈍の人か、」38オ
還りて御蔭を蒙る事多し。是、信の撰ひ人
なり。悪利口才知の人にもいや増り、恥かしからす
や。慎心へし。
29
一、a旱魃、暴風、暴雨、洪水、地震等ハ、天地
日月金神御三方様の御気障りの事ありて、
御尤め之由、此大難ハ、人力を以て防く事あたわす。
国々を震動被為成、一時に覆し給ふ程の御事
なり。b若し地震之節、平生信厚の御氏子ハ、」38ウ
驚くへからす。鎮め鎮りて、只舟に乗たる様の
心持に居るへし。外に家蔵崩るゝ様の事有ても、
其身に別条有へからす。御道の御蔭の広大
なる事、世界一切、此のことし。御道信仰して知るへし。
真直なる広き御道のあるものを
邪しまにゆき迷ひぬるかな
30
一、大御元社にハ、近来御本社御造営の御普
請中なれ共、御勧化、御無筋、其外平生にも」39オ
御初穂、賽銭等に至るまて、貪り欲ケ間敷
事ハ、毛頭不被為成候へ共、以前御蔭を蒙りたる人、
御礼の印とて、多少の御寄附、諸方より参り集り、
如何程御寄附致ても、飾りケ間敷板札揚る事ハ
不被為成。中にハ多分御寄附の人、名前員数を
書印、板札掛度被願候へ共、夫にてハ、外方より、
彼何程寄附致ならハ我ハ何程致へしと、我せきに
なりて、表を飾る而已。身分不相応の寄附し、」39ウ
跡て心配致す様の事ありてハ、かへりて信心に
ならす。志しあらハ、神ハ皆御承知のなれハ、唯何程
成共、己か気安に心任せに致へし。御普請も出来
次第、急かす時を待との寛々たる思召なり。
31
一、a大御元社江参詣致すと、誰にても、遠方の所態々、
参らす共、御神心家有へし、是江参りて御蔭を
取れよと、毎も御辞退なり。御神心家ハ、何処も
御元社に変る事なし。b然るに、御道も次第に」40オ
開ケるに随ひ、御神家も出来増、多き中にハ、終に
御元社にハ御存しも無、色々の勧化、猶帳抔拵へ、

或ハ御道にハ無御祈祷の、御守りのと、種々の事を
こしらへ、世間を惑かせ集るもの有よし、風かに御聞
ありて、金神を煮出しにすると宣し。ｃ御道ハ、
前にも申如く、人に心配懸ぬ様、安心さす様、助ケる
様の事而已にて、勧化の無心ケ間敷事ハ勿論、何に
よらす、貪り欲ケ間敷事ハ、兼而の御禁しめなり。」40ウ
此明らかなる御道を、右様の曲者出て、御道を
穢し妨ケを為すものあり。ｄ又、御蔭を蒙りたる
もの、終に欲と慢心出安し。是、御道の病煩ひ
なり。此欲と慢心より御蔭を取失ふ人、儘あり。
慎ミへし。若しケ様に似たる欲ケ間敷事あるハ、誠の
御神心家にあらす。初心の人、其御心得にて、何処の
御神人家江参詣致ても、何も御心配なく、
心安く致さるへし。　」41オ
32一、ａ御道ハ、願ふより御礼届ケか肝要なり。朝ハ
夜前無事の御礼、暮にハ其日の御礼、月末にハ
其月の御礼、年末にハ其歳の御礼、届ケ奉申上。
ケ様に日送り無事に過る時にハ、身の上別条有
へからす。諸人、先祖より何処の宮寺江参詣
致ても、度毎に願かけはかりして、御礼届ケと
云事を為す。是、たとへハ諸神仏様江借銭に
相成居る道理にて、是か罪科と相成居るとの　」41ウ
宣し。御拝奉るにも、先此御断より奉申上
へし。或ハ、我子か煩ふ時にハ、家床に放れても
彼さへ健に成ハ宜ひと云、病気も全快すると、
云た事ハ忘た顔をして、長の煩ひに物か入たの、
色々の事を申ならへ立て、是からハ倹約抔と云て、
一命御助ケを蒙りたる、肝心の御恩の御礼
届ケも延引に相成もの、儘あり。不埒の至りなり。
譬ハ、人を憑ミて事成就し、何の挨拶も為す　」42オ
等閑なる時ハ、頼れた人も心よからすや。猶又頼
事有ても、再度行かたし道理なり。御蔭を
蒙りた人、御恩を忘るへからす。何もよたつ事も
心配するにも不及。神ハ心中何も彼も御存の事
なれハ、唯己か信を以て、気安に志しの御礼の
印而已致へし。御機嫌成就、御納受あれハ、猶又

御陰も蒙るへし。等閑なる時ハ、終に病気も再
かへる事あらん歟。是身の上の事なり。b又、病人にも」42ウ
限らす、誰にても此御道の事を知らぬ人に、難有
訳を得と咄し聞せ、為よき様、一人でも助ケる様、
御道を御弘め致すか、第一の信心なり、御馳走
なり、其身の徳なり。

天ケ下何をたからと楽しまん
幾代くちせぬ信となりけり

33 無学文盲不知不才の小子、有憚といへとも、
倩世の有様を愚案するに、」43オ
一、神道に、神代の事よりして委き御方にハ、
嘸御蔭も有へし。又、御蔭か無てハ無益の事なり。
此方御道にハ、無学文盲の農民よりして、生神
金光大神と慥に神に被為成。是、目前に顕然
たり。其外、神にまこふ人、数多なり。爰を以て
難有事を知るへし。

34 一、a儒道に、君子ハ務本と聞り。小子ハ、天地を以て
世界の元とし、天地の御神様を深厚礼拝し、」43ウ
日夜忝も御蔭を蒙る事、書記しかたし。
b儒者先生衆にも、病身にして短命の人もあり。
既に孔子の御息伯魚、早世し給ひ、一乃御弟子
顔渕も短命之由。猶伯牛疾ひあり。子御見
廻ひ、御伺ひ被為成、此人にして此疾ありとの御歎
而已にて、御療治にも不叶哉。又、教にも寿命の
延る学文の有事を未聞。又、是ハ何の薬、是を
呑ハ直る、是を用ひハ宜成と云事ありても、是を」44オ
呑ハ寿命か延ると云薬を知らす。又、御道ハ、
正直信を以て願へハ、如何成病ひも日を限りて
平愈なさしめ給ひ、無寿命も御継、長命を
御授ケ被為下成へし。是を比して御道の難有事を知るへし。

35 一、a仏法第一釈尊、猶孔子たにも、皆、御地に生し
御氏子なり。仏法の深き事ハ知らね共、或ハ老少
不定の無常の風とや、猶生者必滅の哀しミ、会者
定離の歎きの人間、わすか五十年抔と色々聴人、皆」44ウ
是道理にして、或ハ念仏題目を唱へ、生なからに
姿を改、仏名号し、石塔を建、後生大しと死する

用意専らにし、死しても、弥仏に成事やら、又ハ
地獄江堕落する歟、迷ふて居る歟、証拠もなきに、
先祖の仏の、今度の仏のと云人あれ共、折節、精霊の
恨ると云事あり。仏に成たるものか恨る道理ハ有
ましきなり。右様の煩悩の心を祓ひ清めて、
いつまても生きる用意を専らに致へし。此方 」45オ
御道ハ、神儒仏の事知るも知らぬも、貴賤
差別無、天地金乃御神様の教を守るへし。
誰も彼もあハれと思へ捨ましき
野夫の中にもこふのものかな
[b]右、如此御道倹にして、諸入費を御止メ、欲と
慢心を御禁しめ、神前に穢れ不浄と云事無。
普請、作事、其外何事にも、年月日柄を
撰ます、自由自在、勝手次第に為す。猶又、 」45ウ
何病気にも、食禁毒養生なく、何成共
好な飲食の品もの出来ても、薬と被為下成。
寿命の無も御継、長命を御授ケ被為下。
其身ハ、生の儘神に御取立被為下成。先祖
より親族一切精霊をうかませられ、其外
世界中の事何にても差支の無ハ、御道の御披
励なり。是、外に比して感応有へし。此
広き大きなる御道、天ヶ下外にハ有へからす。 」46オ
[c]追々御道信仰の人、ケ程有かたき事を知ら
す、信仰延引の事を皆後悔し、信心仕徳、
御蔭ハ取勝、信すへし、仰くへし。[d]余ハ、小子
如きの愚かなる筆紙に尽しかたし。猶書
落せし事も多し。委しき事ハ、御道に
入、深厚して、知るへし。
御道案内巻の下終 」46ウ

述懐

漂しなかれ行身の苦もはらふ
老てや吹し天津神風
千早ふる神に鳴尾の思ふのみ
松も久しき年や経ぬらむ 」47オ

翻刻 金光教布教文書 近藤本『御道案内』

白神弥広真道別之命
我教父之御筆也
藤守　」47ウ

〈46オ付箋〉

一、文明開化御一新之御時に至り、御道も同然、天地開発以来、無二広大の御道の初而開ヶるハ、乍恐今上朝庭御聖徳の相顕るゝもの哉。忝も当今御仁政の御代に出会、万民の幸福なり。万歳を唱ふへし。又愚知なる矢張心開ヶさるものハ、あわれ歎きても猶余りあり。譬に猫に小判と云か如し。

〈箱蓋裏書〉

藤守先生、苦楽庵に於て静養中、大正元年八月二十五日宿痾発して重篤なり。余膝下に在りて看護にあたる。幸に同年十月回復せらる。その時応処の功第一なり、何なりとも所望せよとの事なれバ、先生愛蔵の本冊を乞ふ。即ち先生道を伝授すとて、自署して之を賜ふ。余謹で拝受す。洵に珍重至極なり。

昭和三十四年十月　立教百年祭に染し誌す
金光教教老井上守忠　印

『御道案内』三本（藤沢本・近藤本・伊原本）内容概略対照表

藤沢本	近藤本	伊原本
1序―貴賤の氏子を誘い共に御蔭を戴かん	1序―貴賤の氏子を誘い共に御蔭を戴かん	1序―貴賤の氏子を誘い共に御蔭を戴かん
2a大御元社は正直を基とする	2a大御元社は正直を基とする	2文明開化と同様、旧習を廃する御道
b神国に生まれたからには信心すべし	b本書は、神の言葉を代弁するものなり	3a大御元社は正直を基とする
c御道を疑わず信心すれば御蔭を蒙る	c神国に生まれたからには信心すべし	b神国に生まれたからには信心すべし
d生神たる教組金光大神の履歴と現況	d御道を疑わず信心すれば御蔭を蒙る	c従前と信仰の仕方異なる、旧習を廃せ
〈「大谷の深き恵を」歌〉	〈「大谷の深き恵を」歌〉	d本書は、神の言葉を代弁するものなり
3a金神は、全ての地の有難い大氏神なり	3生神たる教組金光大神の履歴と現況	e御道を疑わず信心すれば御蔭を蒙る
	〈「千早振高天原を」歌〉	f神に嘘は無し
	4a金神は、全ての地の有難い大氏神なり	〈「大谷の深き恵を」歌〉
		g生神たる教組金光大神の履歴と現況
b金神と日月とを合せて三宝様なり	b金神と日月とを合せて三宝様なり	h金神は、全ての地の有難い大氏神なり
c金神は、柔和なる大慈大悲大吉神なり	c金神は、柔和なる大慈大悲大吉神なり	i金神の前では貴賤の隔てなし
d金神の一の眷属は、大将軍なり	d金神の一の眷属は、大将軍なり	j金神は地内の一切万物を守る
e金神を邪鬼の如くに恐れること勿れ	e金神は地内の一切万物を守る	k金神は、柔和なる大慈大悲大吉神なり
4a金神は地内の一切万物を守る		l金神と日月とを合せて三宝様なり
b金神への詔いでない誠の信心をすべし	f金神の誓いは、氏子一統の無事・繁昌	m金神を措いて他神仏を信仰するは失礼
5a金神の誓いは、氏子一統の無事・繁昌	g金神を邪鬼の如くに恐れること勿れ	4a金神の誓いは、氏子一統の無事・繁昌
		b金神を邪鬼の如くに恐れること勿れ

b浮気せず信心して御蔭を取るべし
c御道信心は安し、神文等なく神号のみ
6御道信心の平生心得①
—お上への忠義と倹約
7御道信心の平生心得②
—父母孝行と世間での信義の交わり
8御道信心の平生心得③
—堪忍と陰徳
付1 盗難にも金神のお繰合せあり
9御道信心の平生心得④
—神社仏閣への礼拝
10御道信心の平生心得⑤
—我が子も天地の御分身、御賜物

h金神への詔いでない誠の信心をすべし
5御道信心の平生心得①
—神社仏閣等の尊所と日月への礼拝
6御道信心の平生心得②
—お上への忠義と倹約
〈青砥氏の故事〉
7御道信心の平生心得③
—父母孝行と世間での信義の交わり
8御道信心の平生心得④
—堪忍と陰徳
付1 盗難にも金神のお繰合せあり
付2 大御元社に御締りなく開け放し
9御道信心の平生心得⑤
—我が子も天地の御分身、御賜物
10 a御道信心は安し、自由勝手なり
b神文も不要
c賽銭や初穂も、不要
d種々穢れや忌服を言うこと無し
e御祓や読経も気任せ、信の心が大事
f神儒仏等の隔てもなく、広大無辺なり

c金神への詔いでない誠の信心をすべし
5御道信心の平生心得①
—神社仏閣等の尊所と日月への礼拝
6 a御道信心の平生心得②
—お上への忠義と倹約
〈青砥氏の故事〉
b御道信心の平生心得③
—父母孝行と世間での信義の交わり
7 a御道信心の平生心得④
—堪忍と陰徳
付1 盗難にも金神のお繰合せあり
付2 大御元社に御締りなく開け放し
付3 調伏や呪詛への不審
b御道信心の平生心得⑤
—我が子も天地の御分身、御賜物
c御道信心は安し、自由勝手なり
d食事も制限なく、好む物を自由に
e行も気任せにて、心行第一
f神文も不要
g賽銭や初穂も、不要
h御祓や読経も気任せ、信の心が大事
i種々穢れや忌服を言うこと無し
j神儒仏等の隔てもなく、広大無辺なり

11御道不案内の人は、煩わしき所業のみ
12御道信仰の氏子は、神許蒙り自由自在

g唯、常に天地の恵みを思い忘れるな
h方角等自由に家で神号を唱えよ
i捧げ物の供え方―四足類以外何でも可
j神の祭り方―棚の正面真中か床などへ
kお札・守りは出さない
l日月金神の事を載せる暦を祭るべし
m天下万民の為に祈れば自らも助かる
〈「心たに」歌〉
11信一心を以てすれば御蔭は取勝ち
〈「信あれハ」歌〉
12a祈祷なきゆえ、参詣にも捧げ物不要
〈「大谷の御道をすくに」歌〉
b禰宜等の職業の妨げをするにあらず
［以上、巻上］

13御道不案内の人は、煩わしき所業のみ
14a御道信仰の氏子は、神許蒙り自由自在
b御蔭ないのは信心不足

k唯、常に天地の恵みを思い忘れるな
l方角等自由に家で神号を唱えよ
m願よりも罪のお断りやお礼が先
n捧げ物の供え方―四足類以外何でも可
o神の祭り方―棚の正面真中か床などへ
p日月金神の事を載せる暦を祭るべし
q天下万民の為に祈れば自らも助かる
〈「こころだに」歌〉
8信一心を以てすれば御蔭は取勝ち
〈「信あれバ」歌〉
9a祈祷なきゆえ、参詣にも捧げ物不要
b祈祷者等と違い、恨み等の事はお断り
c御験日―七日だが、心によって変わる
d神に嘘は無し
〈「天地の」歌〉
e心濁らせることなく一心に信仰すべし
f御蔭ないのは信心不足、神任せにせよ
〈「祈りても」歌〉
10a禰宜等の職業の妨げをするにあらず
b智・仁・勇が、御道の三徳
〈「神の戸を」歌〉　［以上、巻上］
11a小子、万人を助けんと欲す
bされど、信なき人は是非もなし
c御道不案内の人は、煩わしき所業のみ
12御道信仰の氏子は、神許蒙り自由自在

13
a御蔭の事―見聞の概略を記す
b御蔭話①　武家の事例
―長州征伐で難を逃れ、鉄砲傷治る

14
a御蔭話②　百姓の事例1
―肥やしなくても収穫大
b御蔭話③　百姓の事例2
―お神酒を振ると虫が失せる

15
a御蔭話④　鍛冶職の事例
―金床傷んでもお神酒で格別の出来
b有難い事無数で、し損ないが無い

16
a御蔭話⑤　商人の事例
―酒屋の傷んだ桶がお神酒で直る

c神に嘘は無し、神任せにせよ
〈「天地の」歌〉
15心濁らせることなく一心に信仰すべし
16
a御蔭の事―見聞の概略を初心者に記す
b御蔭話①　武家の事例
―長州征伐で難を逃れ、鉄砲傷治る

17
a御蔭話②　百姓の事例1
―肥やし半分以下でも収穫大
b御蔭話③　百姓の事例2
―お神酒を振ると虫が失せる
c田畑の乾湿は欲するままにと、神宣う
d五穀成熟も己が心にあり、信心せよ
〈「秋の田の」歌〉

e天下平穏たるよう氏子和睦し信厚せよ
18
a怪我等難を逃れた事、無数有り
b御蔭話④　鍛冶職の事例
―金床傷んでもお神酒で格別の出来

19
a御蔭話⑤　商人の事例
―酒屋の傷んだ桶がお神酒で直る

13御蔭の事―見聞の概略を初心者に記す
14
a御蔭話①　武家の事例1
―長州征伐で難を逃れ、鉄砲傷治る
b御蔭話②　武家の事例2
西南の役で難を逃れること、度々
〈「幾万の」歌〉
15
a農作は、天地日月金神の恵みで成熟す
b御蔭話③　百姓の事例1
―肥やし半分以下でも収穫大
c御蔭話④　百姓の事例2
―お神酒を振ると虫が失せる
d田畑の乾湿は欲するままにと、神宣う
e五穀成熟も己が心にあり、信心せよ
〈「秋の田の」歌〉
f台風等の難も信厚の人には軽く済む
g性根悪しき者も良くなる
h天下平穏たるよう氏子和睦し信厚せよ
16
a怪我等難を逃れた事、無数有り
b御蔭話⑤　鍛冶職の事例
―金床傷んでもお神酒で格別の出来
17商人も自然に繁栄する、先を楽しめ
〈「大谷の御道を直に」歌〉
18
a御蔭話⑥　商人の事例
―酒屋の傷んだ桶がお神酒で直る

b味噌等もお神酒で直る、無事出来る

17御道の出産―腹帯等特別な事なく安産

18疱瘡・麻疹も平生通りにしていて治る

19御蔭話⑥　向明神と称される婦人
―盲目でも縫物等の仕事に不自由なし

20a御道信仰すれば難病も平癒す

b味噌等もお神酒で直る

c右は小事、初心者に知らせるのみ

20縁談では、家柄よりも人柄の吟味が大事

21血統よりも広大なる御道の信仰が大事

22a御道の出産―腹帯等特別な事なく安産

b御道の出産―産後の処理と回復の早さ

c御蔭話⑥　安産の事例1　農家の妻
―田畝より帰り洗足時その盥に安産

d御蔭話⑦　安産の事例2　女髪結
―髪結いさし安産、翌朝また髪結う

e子の要不要にも神の御繰合せあり

23疱瘡・麻疹も平生通りにしていて治る

24御蔭話⑧　向明神と称される婦人
―盲目でも縫物等の仕事に不自由なし

25a御道信仰すれば難病も平癒す

b味噌等もお神酒で直る

c諸神で助からぬのも御道は助ける

d御蔭話⑦　さる夫婦
―夫と、身代りし妻、共に病気平癒

e御蔭話⑧　ある人
―氏神の咎めによる長患、平癒

f御蔭話⑨　元長崎の蒸気船長
―大風雨の中、他船より早く着船す

g御蔭話⑩　大阪樽船持ち
―大阪の樽船、他船より早く着船す

h御蔭話⑪　大阪堀江のガラス商
―信心しお神酒を付けて、怪我治る

i右は小事、初心者に知らせるのみ

19縁談では、家柄よりも人柄の吟味が大事

20a血統よりも広大なる御道の信仰が大事

b生年によらず信仰すれば御蔭を蒙る

21a御道の出産―腹帯等特別な事なく安産

b御道の出産―産後の処理と回復の早さ

c御蔭話⑫　安産の事例1　農家の妻
―田畝より帰り洗足時その盥に安産

d御蔭話⑬　安産の事例2　女髪結
―髪結いさし安産、翌朝また髪結う

e子の要不要にも神の御繰合せあり

22a疱瘡・麻疹も平生通りにしていて治る

bその他小児の病、信心すれば免れる

23御蔭話⑭　向明神と称される婦人
―盲目でも縫物等の仕事に不自由なし

24a御道信仰すれば難病も平癒す

b怪我した時、土や草でも血が止まる
c難船や盗難から逃れた御蔭も無数有り
21御道には毒忌や毒養生なし

22a御道は命継ぐのに、死覚悟するは愚か
b改めて生きて長命する覚悟で陽気たれ

b御道には毒忌や毒養生なし
c痛む時、お神酒を薬のように使うべし
d怪我した時、土や草でも血が止まる
e難船や盗難から逃れた御蔭も無数有り
f御道では治るが本道、治らぬが不思議
g諸人の命を継ぐべしとの神教を受けた
h御蔭の事を申すは、以上で差控える
i御蔭は何でも下さるが、分限は弁えよ
26a神なる身で御道知らぬは、惜しむべし
b御道は命継ぐのに、死覚悟するは愚か
〈「老の身も」歌〉
c命ありての物種、その命は御蔭で延ぶ
d改めて生きて長命する覚悟で陽気たれ
e天地の御賜物を傷付ける仮病は、不可
［以上、巻中］

b御道には毒忌や毒養生なし
c痛む時、お神酒を薬のように使うべし
d怪我した時、土や草でも血が止まる
e御一新同様御道開けたは神国の神験か
f難船や盗難から逃れた御蔭も無数有り
g御道では治るが本道、治らぬが不思議
h人と生れて不幸の人、哀れなり
25天地大氏神は、そうした氏子を守護する
26a御蔭を取り外さぬよう信心尽くすべし
b諸人の命を継ぐべしとの神教を受けた
c命ありての物種、その命は御蔭で延ぶ
d富貴壮んな人、慢心せずよく弁えよ
e死覚悟するは愚か
f改めて生きる覚悟をし、永く安楽たれ
g御蔭話⑮　さる御神心家の三歳男児
―御道の先達衆の祈念で蘇生す
h長命する気になり善事のみ思うべし
i仮病は、不可
〈「老の身の」歌〉
27a天地の御賜物を傷付ける仮病は不心得
b陽気を以て病気にも押し勝つべし
c御蔭は何でも下さるが、分限は弁えよ

23 a 取り勝ちの御蔭も、疑心あれば蒙れぬ
b 神に嘘は無し、神任せにせよ
c 御道を嘲る者あるは、愚かで勿体ない
〈「天地の」歌〉
d 金神の御気障りになれば、厳罰蒙る

24 a 祈祷なきゆえ、参詣にも捧げ物不要
b お札・守りは出さない
c 日月金神の事を載せる暦を祭るべし
d 広大無辺の御道を信心すべし

27 a 御道を嘲る者あるは、愚かで勿体ない
b 金神の御気障りになれば、厳罰蒙る

28 a 神の咎めは自身蒙らずとも子孫が蒙る
b 神も殊更氏子を咎めたい訳でない
c 才知あるより正直愚鈍の方が御蔭多い

29 a 地震等は日月金神の咎め、人力及ばず
b 御蔭広大にて信者は地震にも別状なし

〈「千早ふる神風冨貴し」歌〉

28 a 文明開化と御道は同然、従前と格別
b 御道の治病法は前代未聞
c 御道も旧習を廃し、自由自在
d 金が宝の当世に、金神も開化御一新
e 当時御規則と御道と同じ事、熟慮せよ
〈「人ハ皆」歌〉

29 a 御蔭話⑯ 婦人
―顔の腫物、参詣し信仰して消える
b 御蔭話⑰ 老婦人
―参詣し御話を承って聾が治る
c 御蔭話⑱ さる婦人
―参詣しお神酒を付けて乳癌全快す
［以上、巻中］

30 a 開化と御道同然、上も神も勧善懲悪
b 御道を嘲る者あるは、愚かで勿体ない
c 金神の御気障りになれば、厳罰蒙る
d 土地を粗末にするべからず
e 神の咎めは自身蒙らずとも子孫が蒙る
f 神も殊更氏子を咎めたい訳でない
g 才知あるより正直愚鈍の方が御蔭多い

31 a 地震等は日月金神の咎め、人力及ばず
b 御蔭広大にて信者は地震にも別状なし

〈「真直な」歌〉
25 禰宜等の職業の妨げをするにあらず
26 普請の勧化や平生の初穂無く志は気任せ
27 a 人に心配かけたりせぬようすべし
b 御元社でなく近くの御信心家でも同じ

〈「真直なる」歌〉
30 普請の勧化や平生の初穂無く志は気任せ
31 a 御元社でなく近くの御信心家でも同じ
b 勧化等し世間惑わす御信心家もある由
c 人を安心させる御道、貪りは禁止
d 御蔭を蒙った者、欲と慢心を慎むべし

〈「真直なる」歌〉
32 普請の勧化や平生の初穂無く志は気任せ
〈「此花を」歌〉
33 a 御元社でなく近くの御信心家でも同じ
b 人を安心させる御道、貪りは禁止
c 御蔭を蒙った者、欲と慢心を慎むべし
34 不浄な遺体葬るに方角見ぬのは得手勝手
〈「世の中を」歌〉
35 御蔭話⑲ 大阪近藤某
―参詣途次、車自ら逆行し災難免れる
36 a 御蔭話⑳ 大阪吉田某
―盗賊の難を逃れ、弟が信心始める
b 御蔭話㉑ ある信心家
―留守に入った盗人が動けなくなる
c 御蔭話㉒ 本多某
―御蔭話聞き信心して、疝気平癒す
d 御蔭話㉓ 庭師
―怪我するも、土を付け祈念し治る
e 御蔭話㉔ 川中某
―信心し恣に食べて、瘡治る
f 御蔭話㉕ 二十歳程の娘
―日参しお神酒を付けて、瘤消える
g 御蔭話㉖ 天満辺の人の娘
―信心し家内和合して、結核治る
〈「年ごとに」歌〉

28 a御道では、願うより御礼届けが肝要
b捧げ物は気任せ―四足類以外何でも可
c御道を弘めるのが御馳走

29 a天下万民の為に祈れば自らも助かる
〈「心たに」歌〉
b御道には、生神同然の信心家が多い

32 a御道では、願うより御礼届けが肝要
b御道を弘めるのが第一の信心、御馳走
〈「天ヶ下」歌〉

33 生神顕然の御道は神道に比しても有難い
34 a君子ならぬ小子は天地を元に御蔭蒙る
b寿命継ぐ御道は儒道に比しても有難い

35 a仏法に惑わされず長く生きる用意せよ
〈「誰も彼も」歌〉
b自由自在で広大なる事、御道以外無し

h御蔭話㉗　大阪新町大和屋某の妻
―夫婦で信心して蹠が治る
i諸神仏咎めの病、大御神信仰して治る
j信心家の場合は、災難も神のお繰合せ
k御蔭話㉘　ある百姓
―祖父が不正に買った家等売り立身
l御蔭話㉙　さる信心なる酒屋の親父
―桶に悪事されても上等の酒出来る
m諸神あっても災難あり、御道信仰せよ

37 a御道では、願うより御礼届けが肝要
b御道を弘めるのが第一の信心、御馳走
c御蔭話㉚＝御蔭話⑪「重出」
―大阪堀江ガラス商の怪我の治癒

38 生神顕然の御道は神道に比しても有難い
39 a君子ならぬ小子は天地を元に御蔭蒙る
b御道の者は先生衆と違い只管人を救う
c寿命継ぐ御道は儒道に比しても有難い
d金光様は、諸先生の巧言令色と対照的

40 a仏法に惑わされず長く生きる用意せよ
b書記するところ、誹謗するにあらず

41 a本書は、御道知らぬ氏子への披露の為
b開化と同然の広大なる御道、他に無し

c慢心出安い、慎むべし
d信仰延引を後悔する人が多い
e小子書き尽くせず、余は信心して知れ

〈付箋〉

c信仰延引を後悔する人が多い
d小子書き尽くせず、余は信心して知れ
〈「漂し」歌「千早ふる神に鳴尾の」歌〉
［以上、巻下］

c信仰延引を後悔する人が多い
d小子書き尽くせず、余は信心して知れ
〈「神世とハ」歌〉
［以上、巻下］

〈付記〉

小稿を成すに当って、特に金光教桃山教会より多大なる御高配を賜りました。記して深謝申し上げます。

（本学教授）